

「スラムダンク」を科学する

The science of 「SLAM DUNK」

1K04A181-1

萩原 諒

指導教員

主査 中村好男先生

副査 作野誠一先生

目的

本論文は井上雄彦氏が描いた「スラムダンク」(完全版全 24 巻、集英社、2001, 2002 年)を科学する。「スラムダンク」はバスケットボールを題材としたマンガであり、現代マンガの金字塔的作品とも大作品である。その「スラムダンク」に出てくる組織に焦点を当てて、勝つ組織になるためには何が必要かを提示し、現実社会に「スラムダンク」から見えた理想の組織像が生かされることを本論文の目標とする。

はじめに

私にとって「スラムダンク」は人生のバイブルである。その「スラムダンク」をどのように科学するか、目的を記す。

第 1 章

第 1 章は『「スラムダンク」とバスケットボールというスポーツ』と題し、「スラムダンク」のストーリーの紹介、私と同じく「スラムダンク」を人生のバイブルとしている辻秀一氏、齋藤孝氏の言葉を借りて歴史や人気に触れる。

マンガを科学することは可能なのか、また、そこから得られたものは現実社会でも通用することなのか、本論文の前提ともなる問題も第 1 章で解く。

また、「スラムダンク」がバスケットボールを題材としたスポーツマンガであることからバスケットボールの人気、bj リーグと日本リーグが混在する日本のバスケットボール界の現状も紹介する。

第 2 章

第 2 章は「組織の失敗」と題し、「スラムダンク」に出てくる組織の中で敗戦を喫した湘北高校、豊玉高校、翔陽高校、陵南高校に焦点を当てて、それぞれの組織がなぜ勝てなかったのかを見ていく。

第 1 部では「スラムダンク」の主人公である桜木花道が所属する湘北高校に焦点を当て、目標の重要性を述べた上で負けた理由に目標を見失ったことが考えられ、当初可能性として考えたバーンアウト症候群ではないことを心理学の観点から論じる。

第 2 部では豊玉高校では選手と監督間で目標の共有ができなかったこと、翔陽高校では「選手権監督」であったこと、陵南高校ではキャプテンの精神的未熟さと選手と監督間の信頼関係の篤さが敗戦の理

由ではないかと論じる。

翔陽高校においては「選手権監督」の状況をプロ野球ヤクルトスワローズで 2006 年から 2 シーズン「選手権監督」を努めた古田敦也氏、同じく「選手権監督」の経験がある野村克也氏の事例も交えながら「選手権監督」の状況が好ましくないことについても述べる。

第 3 章

第 3 章は「鬼監督 or 仏監督」と題し、仏監督として湘北高校の安西先生、鬼監督として陵南高校の田岡茂一を紹介し、鬼と仏どちらが監督の理想なのかについて論じる。断定的にどちらがよいとは言えないが、鬼と仏の違いは選手と監督との信頼の篤さの違いがあると考えられ、信頼が篤いほど怒鳴らなくても、あるいは何も言わなくても監督の意思が通じる仏監督のほうが理想なのではないかと結論付ける。また、組織内に鬼もいれば仏もいるといった状態のそのバランスがうまく取れていれば組織にとってはどちらも必要ではないか解く。

第 4 章

第 4 章は「君たちは強い」と題し、「スラムダンク」から見えた組織にとって必要な合言葉について触れる。湘北高校の「君たちは強い」、海南大付属の「常勝」という合言葉を紹介し、その合言葉が組織に与える力を心理学の観点も交えて論じる。

第 5 章

第 5 章は本論文の「統括」とし、第 1 章から第 4 章を通して見えた勝つ組織に必要なことを記す。目標、信頼関係、監督像、選手権監督、合言葉の 5 点について勝つ組織に必要なことをまとめた。

そのどれもが勝つ組織にとって必要なことである。だが、それが全てではなく、上述の 5 点を満たせば必ずしも勝つ組織になれると保障するものではない。他にも組織にとって必要なことは多くある。全てではないが、強い組織には共通していることである。強い組織にはなくてはならないものだと言えるだろう。

部活、サークル、会社、NPO など、人は誰しもが何かしらの組織に所属するものである。私が本論文から得たことを実際の組織に生かすことはもちろん、それぞれが所属する組織で生かされることを望みとする。